

あり。本文四三六頁にして巻頭には詳細を極めたる目次と寫眞及地圖數葉を添ふ。(仁友社發行 價一、七〇〇)〔中村〕

●佛敎史論 境野黃洋著

本書は嘗て著者が公にしたる佛敎史に關する各種の論文十五篇を輯録したるもの。其中「釋迦牟尼佛」、「涅槃經」と佛身論の發達、「數論」と佛敎との關係、「禪に就いて」、「淨土宗の正統非正統の疑義」、「東大寺・圓分寺の敎理」等の章に於ては主として敎理に關する歴史的研究を示し、「達磨に就いて」、「大寺は大寺にあらず」、「奈良の二僧」、「行基菩薩傳」、「傳敎大師に就いて」、「日蓮と親鸞」等の章に於ては史實の考證的研究を示せり。本書は著者が自ら宗敎家たるの立脚點を離れずして、佛敎の史的的研究に努めたる點に於てその面目を窺ふべきものなり。(丙午出版社發行、價一、三〇〇)〔魚澄〕

●後北條氏、民政史論 文學士 牧野純一著

奉公叢書第四編にして著者の明治四十三年、東京帝國大學の卒業論文を發行したるものなり。本書其第一編即本文にては先づ第一章を「後北條氏概觀」とし關東の地理及歴史、早雲の出自の伊勢氏なる事より後北條氏が富國強兵なりし所以五ヶ條を數へ、就中其民政の注意に値すべきことを言ひ、第二章「民政の主義」には

大望ある英雄の民政に留意せし由來を述べ、早雲廿一ヶ條を説き、第三章は「農業に關する民政」と題し、我國史に於て農政は即ち民政なりとて租率の研究をなし、所謂四公六民法の詛を確め後北條氏百年間之れを以て一貫せしは頗る寛大なるものなりと豊臣氏、武田氏、長曾我部氏等の夫れと比較して後北條氏のよく關東の雄たらしめし原因を究め、附加税にも言及し、税制の運用に對する後北條氏の注意の周到なるを記し、又諸般保護制度を列擧し、踴よく行はれしこと後北條氏民政の根本義なる事を例證す。

第四章「工業に關する民政」に於ては諸工匠の保護を記し、第五章「商業に關する民政」にては商人の保護として宿場保護、市場保護、問屋の保護を説き、貨幣政策として撰錢の弊害救治に室町幕府の失敗、氏康の成功せしを記し、第六章「結語」として後北條氏民政の美は早雲一人の功に非ずして守成・繼承の功と相俟つべしとなす。しかも關東既往の歴史即ち頼朝・泰時・時頼等の事蹟が吾妻鏡を通じて與へし感化の輕視すべからざるを説けるは注意に値すべく、又後北條氏が徳川家康に於て名譽ある後繼者を得、後北條氏百年の民政は、關東に於ける武家政治の、光榮ある連鎖なりとて之に深き意義を認めんとせり。第二編は附録にして第一編中に引用せる後北條氏民政史料主要文書百十通を收録す。零碎なる古文書に基礎を置き此著を企てたる著者の眞摯なる態度

を察すべきなり。菊版三〇〇頁、(奉公會發行 價一、〇〇)(中村)

● 朝鮮歴史地理報告 第一 文學博士 白鳥庫吉監修

數年前南滿洲鐵道會社が滿韓地方の根本的研究をなすの要あるを認め白鳥博士に滿韓史の調査を委託せし結果、博士の監督の下に箭内松井池田岩田津田の諸氏熱心に研究し數卷の調査報告書公刊せられて學界に莫大の利益を與へたるは吾人の記憶に新なるものなり。然るに右調査事業たるや同會社の事業としては多少の不便ありしが故に、同社は一定の經費を東京帝國大學に提供し、同大學にて事業を繼續せんことを希望せしを同大學應諾して更に箭内池内松井の三文學士及津田氏に囑託して昨年一月より滿洲及朝鮮に於ける地理歴史の調査に従事せしめ、其成績は調査の成るに従ひ滿鮮地理歴史研究報告として大學より公刊するに至れり。今回刊行せられたる本書は其第一第二にして第一卷には津田氏の勿古考室輩考、安東都護寺府、渤海考、及び松井氏の瑛丹可敦城考附阻卜考と可敦城及阻卜位置圖を收め、第二卷には津田氏の遠代烏古敵烈考、達慮古考、箭内氏の金の兵制に關する研究、池田氏の鮮初の東北境と女眞との關係(一)と烏古及敵烈位置圖、混同江附近圖とを收む。何れも眞摯なる研究の結果たる有益なる論文なり、余輩は斯る事業が大學の手に移りて繼續せらるゝを深く慶賀する

ものなり。(東京帝國大學發行)

● 魏書地理志校録三卷 溫日鑑撰

魏收の魏書は古來藏史の譌を受けしを以て、その地形志の如きも顧みざる人多けれども、同志は兩漢書の遺法を承け、兼て古迹を載せ、後代史志の専ら沿革を録する如きに非ざるを以て、古地志の研究には缺ぐべからざるものなり。然るに收は本と齊人なる故東魏に詳かにして、西魏大統以後は概ね著はさず、又論陷諸州の戸は東西兩魏の未だ分れざりし以前の永熙の官籍に據れり。されば記事の精粗純駁一ならず。依て清末の溫日鑑字は鐵華は歷代正史の地志、水經、元和郡縣志、通典、太平寰宇記、九域志、通鑑法等より方輿紀要其他清人の諸説を採りて精密なる校合を施せり、此書は世に校異又は集釋として知られしが、今般拾香草堂原裝本を得、校録と名けて刊行せり。されば之に依て監本の疎漏、毛本の舛錯を糾し、拓跋一朝の紛如たる地志を明かにすべきのみならず、又以て古史の研究に便益を得べきこと決して尠少ならず。

● 文館詞林二十九卷 許敬宗等撰

此書は唐高宗の朝許敬宗等が勅を奉じて撰み顯慶三年に成りて一千卷となして上り、我國には既に弘仁以前に傳はりしが、其後次第に亡佚して多く世に知られざりき。其後林述齋侯存叢書に此書の